

ジェンダーズ

ジェンダーをめぐる現実には、大きく変化してきた。ことに重要なのは、ジェンダーは「男」と「女」だけではないということである。ジェンダーの多数性を語る例として、しばしば言及されるフェイスブック（英語版）のジェンダーのカスタム設定は、五十八種類である。また、パスポートに男と女以外に第三の選択肢を設けた国も、ドイツ・ネパール・パキスタン・バングラデシュ・インド・ニュージーランド・オーストラリアなど、複数存在している。ジェンダー・アイデンティティの多様性を可視化する仕組みが生み出されるのと同時に、アートや文学や映像などの文化領域において、ジェンダー・バイナリの解体を試みた実践も、様々になされている。「男」と「女」という二つのジェンダーだけで、私たちの世界を切り分けるわけにはいかないのである。

しかしながら、社会や文化に関するジェンダー分析ということになると、依然「男／女」という対をなすカテゴリーの機能の検証に重点がおかれているのではないだろうか。どのように男性性が構築されてきたか、どのように女性は差別されているのか、どのようにジェンダー化がなされているのか。こうした問いは、バイナリな構造を可視化するが、それを揺るがしはしない。「男／女」という二元的構造は現在ももちろん再生産され続け規範的に機能しており、その非対称性も差別性も明らかではあるが、同時にそれを解体することを積極的に志向する分析もなされる必要があるのではないか。本特集は、「ジェンダーズ」と題し、ジェンダーの多数性に目を向け、ジェンダー・バイナリについて問い直すものである。

以上を企図として、写真、アニメーション、小説、スポーツ、映画、という多種のジャンルを対象とした六つの論考を収めた。簡単に内容を紹介しておく。岩川ありさは、トランス肯定的な批評として、インベカヨリ★の写真集『理想の猫じゃない』における、規範や「理想」が帯びる暴力への抵抗を読み解く。隠岐さや香は、アニメーション作品『おそ松さん』における、新自由主義的経済とヘテロノーマティブな恋愛市場からの疎外の様相を分析し、そこに格差社会への批評性とクィア性を見出す。大橋崇行は、西条八十「魔境の二少女」を中心に、少女向けの冒険探偵小説に光を当て、少女読者と少年読者を区別してきた雑誌文化の前提について再考する。飯田祐子は、『コンビニ人間』『地球星人』など、村田沙耶香の小説におけるジェンダー・クィアな実践をとりあげ、ジェンダー・バイナリへの違和と抵抗を抽出する。谷本千雅子と高島亜理沙は、セクシュアル・マイノリティのスポーツ参加に関する調査を基に、「〈女〉とは何か」「公平性とは何か」「倫理とは何か」と問う。そして最後に、クィア映画の可能性を理論的に理解するための見取り図を示す論考として、カール・スクーノヴァーとロザリンド・ガルト『クィア、世界、映画』の序論の翻訳（大崎晴美訳）を収めた。

六つの論考を通して、バイナリな枠組では捉えられない存在や欲望や事象を見出し、その思想や実践を「超域」的に思考したい。（飯田祐子）